

令和4年度 総合的な学習の時間 学習指導研究委員会のまとめ

一 テーマ

自ら関わり、地域のよさを実感し、自己の生き方につながる総合的な学習の時間の価値を見いだしていく

二 テーマ設定の理由

学習指導要領には、「何を理解しているか、何ができるか」という『知識及び能力』の観点、「理解していること・できることをどう使うか」という『思考力・判断力・表現力等』の観点、「どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか」という『学びに向かう力、人間性等』の観点の三つの柱がある。子どもたちの「願い」の実現に向けた学習を展開し、地域の「ひと・もの・こと」に自ら関わることで、上記の資質・能力を育成していくことができるよう、本テーマを設定した。

三 研究の経過

- | | | |
|-----|-----------|--------------------------------|
| 第1回 | 5月 2日(月) | 総委員会・年間計画等打ち合わせ会 |
| 第2回 | 6月23日(金) | 教育課程事前授業参観・教育課程研究協議②について(東小学校) |
| 第3回 | 7月26日(水) | 各校の実践発表・教育課程研究協議②について |
| 第4回 | 9月 6日(水) | 教育課程研究協議会・研究協議②運営(東小学校) |
| 第5回 | 11月21日(火) | 各校の実践発表 |
| 第6回 | 11月27日(月) | 総委員会及び反省 |
| 第7回 | 12月26日(火) | 各校のレポート提出 |

四 研究の内容(各校の実践から)

上記の研究テーマに沿って各校で実践を行ってきた。総合的な学習の時間は、素材に関わる活動的な時間も多し。活動の中で、子どもたちがどのような表情を見せたり、行動したりするのか、またどのような場面や出来事と出会ったときに、子どもたちの新たな発見や気づきが生まれるのか。本委員会では、子どもたちの「願い」に沿った学習のなかにおける、子どもたちの気づきの姿を捉えることを大切にしてきた。

以下、委員による実践事例を紹介する。

【実践1】 竹組の「竹物語」

～竹を再利用して竹炭をつくろう・竹炭を使って学校や全校のために何かしたい！～

【実践2】 「M先生の出身地、南アフリカについて知ろう！」「M先生に日本文化を紹介しよう！」

【実践3】 ぼく・わたしの「石」 石の博物館を開きたい！

【実践4】 依田川探検隊

【実践5】 「押出川のホタルを守りたい」

竹組の「竹物語」

～竹を再利用して竹炭をつくろう・竹炭を使って学校や全校のために何かしたい！～

東御市立和小学校

1 きっかけの思い

去年、1年間子どもたちは、自分だけのオリジナル竹馬や竹灯籠を地域の竹を使って作った。竹集めや竹細工の指導をしていただくために地域の方と関わるなかで、竹を育てることの大変さや使われなくなってきた竹の使い道に困っているということ学んだ。これを踏まえ、今年の総合立ち上げの際、割れてしまって使えなくなった竹馬や竹灯籠をみて、「この竹たちを変身させたい。」「もう一度何かに作り変えられないかな。」と子どもたちから声があがった。学年でSDGsを勉強したこともあり、「このまま捨ててしまうのはもったいない。」ということで割れてしまった竹の変身計画がスタートした。

2 活動の深まり

活動が本格的に動き出したのは、A児の一言だった。「先生、竹って炭にできるらしいよ！」グループで竹で作れるものを調べていくなかで見つけた「竹炭」というA児のアイデアに多くの子どもたちが賛同し、活動は竹炭づくりに決定した。しかし、そこで私は「竹炭を作ったらどうするの？」と投げかけた。

A児は「確かに、作るだけ考えてた。」B児「誰かに渡したいな。」C児「全校の人に渡すのは?」「いいね！全校のみんなにあげたい！」

私は、このやりとりに去年と比べて大きな成長がみられたなと感じた。去年はとにかく自分のための竹馬、自分だけの竹灯籠、というような、自分のためにという願いが強かったが、今回は誰かのためにという願いへと変わった。地域の方に教えてもらい、感謝や喜びを感じた子どもたちは、今度は人のためになにかしたい！と思い始めたのである。人とのつながりを信じる子どもの姿は素晴らしいなあと感じた。



3 活動のなかで感じた疑問

竹炭づくりは本やインターネットで得た知識で、子どもたちが主となって進めていった。

全校のためにという願いはクラスでの話し合いを通して、竹炭の消臭の力を使って、学校の中すべてのトイレに竹炭を置こう！ということになった。入念に準備をしていざチャレンジしてみると、なんと1回目から炭の形にすることができた。「やったー！できてる！」と喜ぶ中、少し経つと少し疑問を感じ始める子どもたち。A児「なんか臭くない?」C児「これ成功なのかな?」消臭を目的に作った竹炭から煙臭さやアルコール



ルのにおいがするのである。ここで浮かんだ疑問が子どもたちの活動をさらに深めていった。地域の方に竹炭ができているのかインタビューをしたいということで、私も同行し聞きに行った。「これは焼き足りないなあ」と大きな情報をもたらした子どもたちは現在焼き直しのリベンジに向けて活動を続けている。

4 今後に向けて

私が紹介した竹炭づくりのプロの方との活動もしつつ、子どもたちの納得する形で竹炭を完成させ、全校のためにという願いに向け残りの活動も見守っていきたい。

実践 2

「M先生の出身地、南アフリカについて知ろう！」「M先生に日本文化を紹介しよう！」

上田市立中塩田小学校

1 単元設定の理由

中塩田小学校では、3・4年生がALTの先生と担任による授業、5・6年生が日本人の英語専科による授業を受けている。そのため、5・6年生がALTの先生と接する機会はほとんどない。5・6年生からは、「3・4年生はいいな。」「私たちもALTの先生と話してみたい。」などとの声があがっていた。

中塩田小学校では、2学期になり、ALTの先生が新しく変わった。南アフリカからの先生を迎え、子ども達は「南アフリカってどんなところだろう。」「南アフリカから来た先生はどんな人だろう。」と南アフリカの文化や新しいALTの先生への関心が高まっていた。子ども達から、ALTの先生との交流会を希望する声があがり、総合的な学習の時間を使って、交流会を設定することにした。

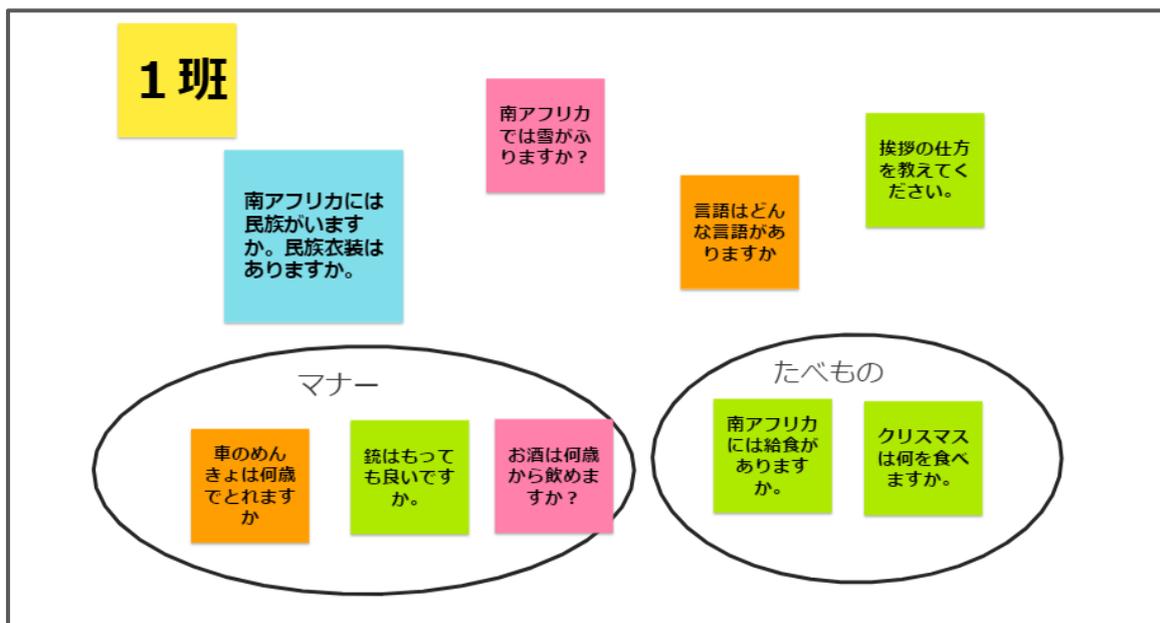
2 単元目標

M先生との交流を通して、他文化を尊重したり、日本文化の良さに気づいたりすることができる。

3 実践

(1) ALTの先生との交流

第1回の交流会では、ALTのM先生に南アフリカの文化や生活についての紹介をしていた。M先生から教えていただく初めてのことに、子ども達は目を輝かせて、話を聞いていた。しかし、交流会後の学習カードに、「M先生に南アフリカの小学校は給食があるか聞きたかったのに、緊張して聞けなかった。」など、悔しい気持ちを書く児童もみられた。そこで、聞きたいことをリストアップしてまとめ、第2回目の交流会に向けての準備をした。事前に質問内容の英訳をALTの先生へ伝え、第2回の交流会を実施した。



(↑グループごと聞きたい事を子ども達がまとめたもの)

第2回の交流会では、子ども達が聞きたかったことをもとに、南アフリカについて教えていただいた。実際に民族衣装をもってきていただいたり、ALTの先生の実家でのクリスマスパーティーの様子が分かる動画を見せていただいたりして、子ども達の他文化への興味がより深まり、世界の広さを実感できる交流会となった。



(2) 国語の学習と提携した日本文化の紹介文づくり

交流会を通してALTのM先生から南アフリカの生活や文化について教えてもらった子ども達は、「今度はM先生に日本の文化を紹介したい」「日本のことをもっと知ってもらいたい」という気持ちを持ち始めた。そこで、国語の単元『日本文化を発信しよう』と結びつけて、M先生に向けた日本文化の紹介スライドの作成を行った。完成したスライドをもとに、M先生に向けて1人1人、日本文化の紹介を行った。



(3) 日本の遊びをM先生と一緒に体験する計画

M先生への紹介文の中に、日本の伝統的な遊び（花札・はないちもんめ等）の紹介があった。M先生が「初めて知った」と話してくれ、子ども達の中には「今まで一度も花札をやったことがない」という児童もいたため、M先生と一緒に日本の遊びを体験してみようと計画を始めた。3学期開催に向けて、M先生と日本の伝統的な遊びを体験するお楽しみ会を計画している。

4 まとめ

M先生との交流を通して、外国の文化と日本の文化の違いを知ることができた。交流会前まで「違い」や「差」を否定的に捉える児童もいたが、それぞれ違って良いということを実感できる機会となった。また、外国の文化に目を向けることで、自分の文化をもう一度見つめ直す機会にもなった。自分達の生まれ育った国、日本の伝統的な文化やマナーを守って生活しようという気持ちが芽生えた。

実践3

ぼく・わたしの「石」 石の博物館を開きたい！

上田市立川辺小学校

1 研究の経過

5月	学校近くを流れる産川へ行った際、石に興味を持った。
6月～7月	産川や学校周辺を探索し、それぞれ選んだ石を観察したり、磨いてみたりした。
9月	一学期の活動を振り返り、「石の展覧会を開きたい」という願いが生まれる。
10月～11月	展覧会に向けて、E先生のお力をお借りして石磨きに取り組んだ。
12月	全校に向けて「石の展覧会」を開催した。

2 研究の内容

石との出会い

5月、学校近くを流れる産川に散歩に行ったときのこと、「先生見て！きれい！」と石を見せてくれたAさんがいた。「ほんとだ！いっぱいきれいな石がある！」「これ、知ってるよ。火つけ石なんだよ。」Aさんの一言に反応し、多くの子どもたちが石を探し、語り始めた。ここから、石について探求する活動が始まった。

自分だけの石を目指して

産川での活動から、子どもたちの石への興味が高いことを生かして、学校周辺にも目を向けて校庭や中庭、昇降口前などを歩きながらお気に入りの石を探した。「みんな石に興味があるね。この石、ちょっと観察してみようよ。」と問いかけると、Bさんは「いいね！やりたい！」と声高々に言った。教室に戻ってアイデアを出すと「虫眼鏡で観察してみる」「歯磨き粉を塗ってみる」「磨いてピカピカにしてみたい」など、無数のアイデアが挙がった。

子どもたちの願い「石の展覧会を開きたい」

2学期に入り、1学期の活動を振り返ってみると、磨いた石をどうするかという話までは発展できずにいた。そこで、子どもたちに「1学期に石を磨いたけれど、2学期はどうする？石を磨いて、みんなはどうしたい？」と問いかけた。すると、Cさんから「石の博物館をつくりたい！」というアイデアが出た。「誰を呼ぶ？」「どんな展覧会にする？」「今できることは？」Cさんの発言から話が膨らみ、「全校に向けて石の展覧会を開こう！」という方針が決まった。そのためまずは自分たちの石を磨かないと！と、やすりをつかって一生懸命石を磨き始めた子どもたち。すると、しばらく経ったある日、「もっとピカピカにしたいけど、どうしたらいいのかな。」「この形を変えたいけれど、できない。」と悩むDさんの姿があった。何とかならないかな…と周囲の先生方に相談していく中で、「石磨きなら、前に子どもたちとやったことが



あります。お手伝いしますよ。」と声を掛けてくださった E 先生がいた。

E 先生の力をお借りして、石の磨き方を教えて頂き、どんどんきれいになっていく自分の石にワクワクする子どもたちがいた。M先生との出会いから、子どもたちの願いは、より強く、前のめりになっていった。

石の展覧会開催へ

12月、いよいよ石の展覧会に向けての準備が始まった。まず「どんな展覧会にしたい？」と問いかけると、「全校に向けてだから、全校のみんなが楽しめる展覧会にしたい！」との声が多く聞こえた。そこで、学習問題を「全校のみんなが楽しめる石の展覧会を開催しよう。」とし、準備すべき内容を挙げていった。意見を交わし深めていく中で、話し合いが苦手な F さんが、熱心に班の仲間と話している姿があった。聞いてみると「全校が一気に見に来たら教室がいっぱいになっちゃうから、学年で分けたらいいと思う。」と話していた。その話を聞いた G さんは「え、じゃあ、5・6年生からにしたらどう？1年生は、手が小さいから石を落としてしまうかもしれないし。ゆっくり見れるようにしたらいいんじゃないかな。」と続けた。「ただ何となく〇〇と思った」と感想を述べるが多かった G さんが、理由を明確にしながら意見を語る様子を見て、石の展覧会への熱意を感じ、教師である自分もワクワクした。その後「呼びかけ係」「ポスター係」「会場・体験会係」「放送係」の係に分かれ、それぞれで仕事を分担して準備を進めた。そして当日、三日間に及んで開催した石の展覧会には、多くの児童が押し寄せ「すごい！どうやって磨いたの？」「綺麗な石だね。」と感動するお客さんを見て、満足そうに笑う子どもたちがいた。当日もお客さんの呼び込みや石を見ている人への説明、石磨きの体験会の運営など、来てくれた児童・先生方に向き合い、関わろうとすることができた。その後の活動の振り返りを、H さん、I さんは以下のように綴っていた。一学期からの活動が、学級みんなの願いとなり、それを全校に伝えられることができた実感を、子ども自身が感じられていたように思う。



H さん：最初は、本当に何もかも完璧にできなさそうで心細かったけど、みんなで協力して「ここはこうしたらいいんじゃない」などの意見が合わさって完成したと思う。みんなで頑張れてよかったし、心に残った。

I さん：いろんな人の笑顔が見れて嬉しかったし、また石のてんらんかいをやりたいとおもった。体験会をやっている人が「楽しい」と言ってくれたのが嬉しかった。

3 研究の成果と課題

成果

- ・子どもたちの願いから始まり、活動を据えることで、興味関心が高い状態で活動を進めることができた。
- ・「石の展覧会」という目標が決まったところで、「どのような準備が必要なのか」「誰に許可を取るべきなのか」といった計画や手順を子どもたち自身で考え、実行することができていた。
- ・展覧会を一回のみの開催ではなく「1・2年生」「3・4年生」「5・6年生」に分けて三回するアイデアが出たことで、一回目の成果や課題に目を向けて、二回目、さらに三回目と準備をし、よりよい展覧会に向けて試行錯誤できたことで、課題解決の視点を養うことができた。

課題

- ・学級の枠を超え、学校全体の人とつながることができたことはよかったが、学校外につながりをつくることができなかった。石の博物館や石材店など、地域とつながれる要素があるので、多くの「人・もの・こと」と関われる環境づくりを丁寧に行っていきたい。
- ・活動のふりかえりのまとめ方を個人にとどめてしまったが、改めて時間を取りながら、各係での活動の振り返りや、全体での活動の振り返りを行うことで、より目標に向けたよい振り返りができたのではないかと感じた。

依田川探検隊

上田市立丸子中央小学校

1 学習のはじまり

社会の「くらしを支える水」を通して、自分たちの水がどのように飲料水として届けられているかを学習した子どもたち。後に諏訪形浄水場へ社会見学に行き、施設で働く人の努力や工夫によって水が作られていることを知る。しかし、施設の方から「ここで作っている水は、みんな（丸子の人たち）が飲んでいる水ではないよ。」と言われ、衝撃を受ける。ここからクラスの学習が始まっていった。諏訪形浄水場の水の取り入れ口は千曲川ということを知り、自分たちの水は「依田川」からきているのではないかと予想した。

2 子どもの願いと活動

きっかけの願い 「自分たち飲んでいる水は依田川からきている？」 「依田川に行ってみよう！」

5月 依田川での探索

「水が冷たい」「生き物がいそう」「川に入ってみよう！」

初めに行った場所は、水量が多く、水の流れるが速いため、子どもたちが川に降りるのは難しそうだった。

「先生！もっと下に下りられそうな場所あるよ！」

「下りられそうな場所を探してこよう！」



6月 依田川探検の始まり

家の人に聞くなどして、川に下りられそうな場所を見つけることができ、活動開始！

「目で見るときれいだけど、小さなゴミがあった」

「依田川はどこまで続いているんだろう」

「水草のところに、魚や川虫がたくさんいた！」

「河原に色んな形や色の石があっっておもしろい」



何度か依田川に行って活動をするうちに、子どもたちの興味は「石」と「生き物」の2つになっていった。

インターネットや本を使って、自分たちが調べたいことについて調べ学習を進め、スライドや模造紙にまとめた。

【石チーム】

「お気に入りの石を見つけて調べたい」

「石の名前を調べたい」

「どうして色んな色の石があるの？」

「色んな形の石があるのはなぜ？」

「石を種類ごとに分けたい」

【生き物チーム】

「水生昆虫の種類を調べたい」

「つかまえた生き物の生態を調べたい」

つかまえた生き物：アブラハヤ・カゲロウ

サワガニ・ミズカマキリ

カワゲラ・タイコウチ・ドジョウ

8月 内村川探検（次年度統合になる西内小学校との交流）

クラスの活動が進むなか、交流をしている西内小学校から「内村川に是非来てみないか？」とお誘いがあった。依田川は、三才山峠方面から流れてくる内村川と丸子で合流して1つになり、大屋で千曲川に合流することを地図で調べていた子どもたちに提案

「依田川と内村川でどんな違いがあるか調べてみたい！」

～内村川探検で分かったこと～

「内村川にはサワガニがたくさんいた」「川の水量が少なくて川幅も狭い」「川の深さも依田川より浅い」

「黄鉄鉱？石英みたいな石を拾った。調べてみたい」「黒っぽい石が多かった」

11月 石博士との出会い

理科専科のF先生に、顕微鏡などの道具を借りているうちに、「鉱物について詳しい人がいるよ！」との話があった。図鑑やインターネットで石の種類や特徴を調べていた子どもたちだが、自分たちだけでは見当がつかないものが多く、ちょうど困っている時のベストタイミング。

「先生、本で見てもいっぱいあってよく分からない…」

ここで石博士(山本さん)のことを子どもたちに伝えた。聞きたいことをまとめ、石博士との出会いをととても楽しみにしていた。当日は、自分が知りたいことを明らかにするべく、進んで山本さんに関わっていく姿が見られた。分かったことを、スライドでまとめたり、仕分けをして展示できるようにしたり、改めて顕微鏡で観察したりと、さらにそれぞれのやりたいことに向かっていた。



12月 学校の庭にある「岩石園」を復活させよう！

石博士と繋がりを作ってくれたF先生から、「学校の岩石園にたくさんの鉱石があるが、プレートが朽ちてしまい、分からないものが多くて困っている。クラスでなんとかしてもらえないか？」と依頼があった。

「石博士にお願いして、岩石園の石の名前を調べる！」

自分たちで学習したことをもとに見当をつけてみたが、やはり本当かどうかの確認がない。石博士にまた来てもらって、教えてもらいたいということで、子どもたちから山本さんにお願いをした。3学期は、岩石園の石を調べていくことになり、2学期を終えた。

3 活動のこれまでと今後の方向

社会科の学習をきっかけに総合的な学習へと展開した。依田川での活動は子どもたちにとって楽しい活動だったが、活動だけで終わることのないよう、探究的な学習になるにはどうしたら…と考えながら、子どもたちの興味がどこに向いていくのか様子を見守った。「生き物」と「石」の2つに的が絞られてからは、子どもたちはどんどん対象にのめり込んでいった。

また、「石博士」との出会いは大きく、学習がさらに深まった。専門的な知識をもつ人から教えてもらうことへの子どもたちの反応や表情は、やはり生き生きとしている。新しいものに出会った時の感動は大きい。「ひと・もの・こと」と出会ったとき、総合的な学習の面白さはさらに増していくと改めて実感している。

まとめたことを全校に伝えたいという願いももっているので、3学期はその願いも実現する形にしていきたい。

きっかけの思い 「人のためになることをしたい」「みんなの役に立ちたい」
「みんなのために何ができるか」

「ごみ拾い」をしたい

「きれいな街にしたい」

「きれいな川・自然にしたい」

学校近くの公園のごみ拾い

- ◇ 思っていたよりもゴミが多かった。いっぱい拾ってきれいな上田市にしたい。
- ◇ 最初はゴミが落ちていたけど、みんなで拾ってへったので、いい気持ちになった。
- ◇ ポイ捨てとかなしないで、ちゃんとゴミ箱に捨ててくださいと思った。

「川をきれいにしたい」
「生き物が暮らしやすい川にしたい」

「東小のそばにホタルが飛ぶ川がある」

- K児「おばあちゃんちのすぐそば」
「先生、一緒に来て見てみて」
- ・ホタルにかかわる看板や掲示板が至る所に掲示
- ・来月(6月)には「ほたる祭り」が開かれるという案内

「みんなでホタルを見に行きたい」

ホタルを観る会(6月9日・17日)

- ・親子で多数参加。押出川流域自治会連合会の事務局長柳澤さん、会長の松山さんによるご案内
- ◇ どんどんホタルがいたから、すごいきれいだなと思いました。
- ◇ 川をきれいにしている人のおかげでホタルが見られるんだとわかりました。
- ◇ ホタルがこれからもとぶように、そうじをしたい。
- ◇ ホタルについてもっと調べたい。(一生・環境・えさ・天敵など)
- ◇ ホタルやえさのカワニナを育てて放したい。



ホタルについて調べてみよう

- ・ホタルの生態や光り方、エサやすみかななどを、インターネットや本で詳しく調べ、スライドなどにまとめた。
- ◇ 水槽でホタルが飼えるみたいだから、飼ってみたい。カワニナも育てたい。
- ◇ ホタルを飼っていいかや、清掃活動のことなど、柳澤さんに聞いてみたい。

柳澤さんとお話の会(7月6日)

Q. 川の清掃活動をやってみたいのですが? カワニナはどうやって手に入れますか?

A. 川が深い(壁が高い)ので、安全を考えると清掃活動は過酷。朝5:30から毎朝ゴミを拾っている人もいる。子どもたちには、まずホタル水路(健康プラザ北側の細い水路)のカワニナを捕って、押出川の本流に移す活動をしてほしい。また、大きな水槽(柳澤さんも持っている)を使って教室で育てることも可能。

Q. ホタルを育てて、押出川に放してもいいですか?

A. 今年ホタルの数が少なかったので、幼虫を別の場所に移してしまうと、押出川のホタルがいなくなってしまう。1年を水槽で過ごすより、押出川の自然の中でホタルに過ごしてほしい。やろうと思えばできるけど、今年は難しい。自然を良くした方がいい。ほかの地域のホタルを育てて移すのも、水が合わなかったり、押出川のホタルとケンカになってしまうので、良くない。

ホタルの幼虫を育てたい

・押出川のホタルの幼虫を育てたいという願いがあったが、柳澤さんの思いを受けて、その難しさを実感した。それでも、ホタルの幼虫を観察したいという願いは強く、その実現の可能性を探っていくことになった。

カワニナを育てて増やしたい

- ・押出川の支流にあたるホタル水路にカワニナをとりに行き、柳澤さんからお借りした大水槽で飼育した。
- ・サワガニなどの水生生物も捕まったので、一緒に飼育した。



ホタルの幼虫がやってきた！（11月）

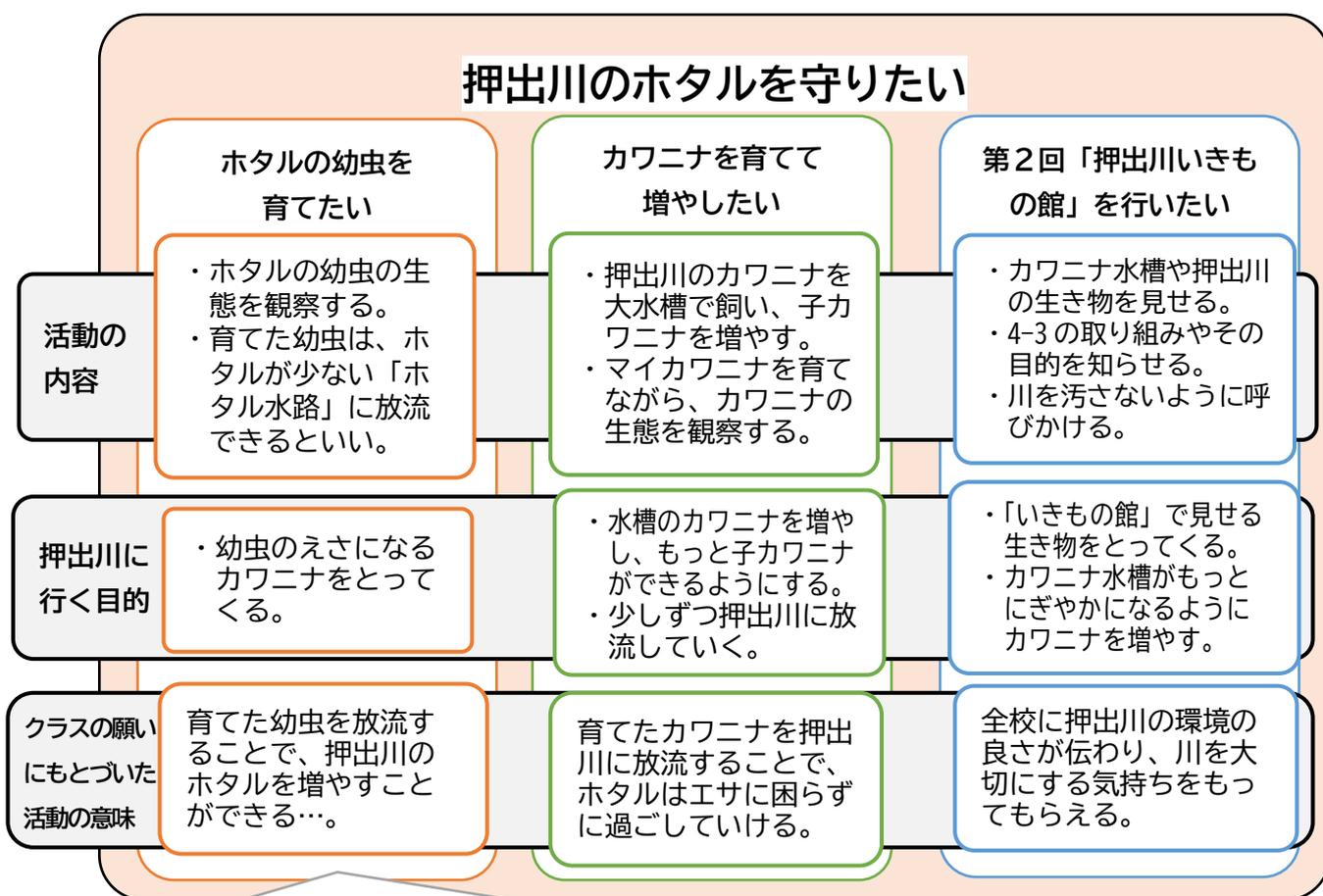
- ・上田市下塩尻桜つつみホタル会の宮下会長さんを通して、幼虫20匹をいただけることになった。
- ➡「ホタルの幼虫を最後どこに放せばよいか」が議論になる。「**押出川**」か「**下塩尻の水路**」か。
- ◇ **押出川**に放せば、「押出川のホタルを増やす」という4-3の願いをかなえることができる。
- ◇ 4-3に協力してくれている柳澤さんのためにも、**押出川**にホタルを放したい。
- ◇ ホタルを飼いたいという願いをかなえてくれた宮下さんに感謝をこめて、**下塩尻**に返したい。

押出川の生き物を全校に見てもらいたい

- ・月1回ペースで水路に行くことで、教室に多くの生き物がいる状態になった。そこで、「押出川いきもの館」として、全校のみなさんに見てもらおうことにした。
- ・PTA主催の「東小祭」の際に、児童玄関前でカワニナ水槽や生き物、クイズコーナーなどを展示した。
- ➡多くの方に足を止めていただき、ある程度の満足感を得ることができた。ただ、直前に学級閉鎖があり準備が不十分だったこと、当日体調不良で参加できなかった人が多かったことから、「もう1回やりたい」という願いが生まれ、第2回を計画することにした。

活動の終末にむけて…クラスの願い「押出川のホタルを守りたい」とのつながりは？

活動の終末にむけて、「ホタルの幼虫」の議論から、自分の先の見通しの曖昧さ感じられました。そこで、学習を通して生まれた活動が、どのようにクラスの願いに結びつくのか整理してみました。



クラスの願いを考えると、押出川に放流することができれば、活動の終末として、クラスの願いに直結する終わり方になる。ただ、クラスの願いを大切にしながらも、「押出川のホタルは押出川で育てたい」という柳澤さんの迷いに触れ、ホタルをくださった宮下さんへの感謝の気持ちももった子どもたちには、今すぐに納得解を出すのはとても難しいのだなと感じた。

「カワニナを食べさせるか」にしても「幼虫をどうするか」にしても、子どもたちはこれまでに出会った「人（柳澤さん・宮下さん）」「もの（ホタル・生き物・カワニナなど）」「こと（川の環境）」を根拠にして、自分の思いを語っていた。3学期、「幼虫をどこに放流するか」、みんなの納得解を見出すための話し合いがきつと行われるだろう。その話し合い自体が、この1年間の活動を通した学びのふり返り・まとめになっていくのかなと思っている。いただいた幼虫を押出川に放すか、下塩尻に返すか、それは、ホタルの幼虫との暮らしの中で、子どもたちが見出ししていくのかもしれない。

五 研究の成果と課題

- ・委員会では、各校の実践発表を行い、貴重な学びの場になった。学校のある場所によって、学習の素材となるものが異なり、どのような学習を展開しているのか参考になった。また、委員同士が子どもたちとの学習を進めていく上での悩みなどを相談できる場にもなった。
- ・教育課程研究協議会は、数年ぶりに参集での全日開催。午後の研究協議Ⅱでは、東小学校の実践に関わる地域の方から話を聞くことができた。押出川とホテルについて、フィールドワークを行うこともでき、地域素材に触れるいい機会になった。地域素材をどのように授業に活かしていくか、子どもたちの願いをもとにどのように授業を進めていけばよいかを考えることができた。
- ・今年度は、委員が小学校のみだったので、次年度は中学校からも委員の選出があるとよい。校種が違くと、授業の様子を知る機会も少ないので、中学校の総合的な学習の時間についても学ぶ機会にしていきたい。